V. 国際連携

本センターでは、海外の大学教育の研究開発組織や研究者・実践者との交流・共同研究を進め、そのプロセスや成果をシンポジウム、研究会、書籍などで公開しています。

1. 国際シンポジウム「大学教育の創造的破壊と未来―世界最先端の次世代大学が仕掛けるエリート教育を探る―」

次世代の大学として世界的な注目を集めているミネルバ大学（Minerva Schools at KGI）より、創立者でCEOのベン・ネルソン氏ほか2名をお招きし、5月30日に、京都大学芝蘭会館にて国際シンポジウムを開催しました。

ミネルバ大学は、世界7都市の学生寮を移動しながらオンラインで学ぶという、ユニークな全寮制の4年制大学です。2014年に米国サンフランシスコで設立された新しい大学ですが、開学2年目には早くも、入学希望出願者が98ヵ国1万1千人以上（合格率2.0%）に達しています。

ミネルバ大学のカリキュラムは、最新のICT（情報コミュニケーション技術）を活用した少人数のセミナー形式の授業と、授業外でのプロジェクト学習を中心に構成されています。「批判的思考力」「創造的思考力」という2つの個人的技能と「プレゼンテーション能力」「対人コミュニケーション能力」という2つの対人的技能を合わせた「4つのコア技能」を、フィールドでの豊富な体験学習、および、パフォーマンス評価と学習データ分析に基づいた即時的なフィードバックや適切なアドバイスを通じて、習慣的・経験的に身につけられるようにデザインされています。

本シンポジウムは、ミネルバ大学に代表される新しいイノベーティブな大学教育の可能性や課題、次世代大学の台頭が既存の伝統的な大学に与えるインパクトや影響などについて議論と理解を深め、大学教育の未来を予見することをめざして企画されました。

平日の午後にもかかわらず、参加者数は159名にのぼり、このテーマやミネルバ大学の取り組みに対する関心の高さがうかがわれました。参加者の内訳は、学内74名（教職員43名、学生31名）、学外85名（ゲスト登壇者4名含む）で、学内からの参加者が多かったこと、とりわけ、いくつかの授業とタイアップしたことにより学生の参加者が多かったことが注目されます。

また、事後アンケート（回答者数57名）の結果を見ると、有意義度は平均4.4（5件法）で、9割を超える参加者から有意義であったという回答が得られました。自由記述では、「ミッションを明確にした上で、既存の教育を問い直すこと、学習者が主体的になれるような仕組みをつくること。それが体現されていたように思います。自分の現在の学びを問い直す機会になりました。」「ミネルバ大学が目指す、真の高等教育（特別なものではなく）について理解が深まった。また、感銘を受けた、その理想や情熱に。」「工学部系では実験実習があるのでただ単に本やインフォメーションだけでは履修できないと思います。ミネルバ大学の手法は文系では良いと思います。」「反グローバリズム時代になってきていますので、ミネルバ大学のような大学がさらにエリートと大衆のギャップを生むと思いますが、どうでしょうか？」といった意見が寄せられました。批判的なコメントも含め、大学教育のあり方について思いをめぐらす機会になったことは間違いないようです。

このような国際シンポジウムが、教職員の研修としてだけでなく、学生の学びにとっても意義をもちうることが感じられたシンポジウムでした。

● 国際シンポジウム：http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2017/07/20170530.pdf

（松下 佳代）

プログラム	
14:00 ～	**開会挨拶** 飯吉 透（京都大学教育担当理事補・高等教育研究開発推進センター長）
14:05 ～	**活動報告「京都大学の取り組み」** 酒井 博之・田口 真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）
14:25 ～	**特別講演「ミネルバ大学と高等教育の未来」** 山本 秀樹（ミネルバ大学日本事務所代表）
14:45 ～	**基調講演 “How to Update Existing Higher Education?”** Ben Nelson（Founder, Chairman, and CEO, Minerva schools at KGI）
15:25 ～	休憩
15:35 ～	**対談 “Open Educational Innovation: Creative Destruction or Destructive Creation?”** Ben Nelson × 飯吉 透
16:15 ～	**パネルディスカッション** モデレーター：飯吉 透 指定討論者：君和田 卓之（三井物産サービス事業部ヒューマンキャピタル事業室長） 松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授） パネリスト： Ben Nelson Kenn Ross（Managing Director, Asia, Minerva Schools at KGI） 君和田 卓之 松下 佳代
17:45	閉会

2. 訪問・参加報告

(1)AEARU(The Association of East Asian Research Universities : 東アジア研究型大学協会)

会議名称 AEARU Symposium on Teaching and Learning
(http://www.shss.ust.hk/conferences/2018-01-05-AEARU-teaching-and-learning/)

期間・場所 2018年1月5～6日、香港科技大学(香港)

参 加 者 飯吉 透

本シンポジウムでは2日間に渡って、AEARU加盟校におけるオンライン教育に関する優れた取り組みや課題について、各大学のアドミニストレーターを中心に情報・意見交換が行われました。京都大学参加者は、初日の全体セッション“Training Program Sharing on Teaching and Learning Using On-Line Resources”で司会を務め、“Promoting the Creation, Use and Re-Use of Online Educational Resources to Advance Teaching and Learning”と題した講演で、本学のMOOC、OCWやSPOC等のICT活用教育とその促進のための各部局や教職員に対する支援に関する取り組みについて発表を行いました。また、2日目のパネルセッションでは、今後MOOC等をAEARU加盟校間の交換留学の活性化や大学の連携による教育の国際化のためなどの目的に活用する可能性を巡る議論に、パネリストとして参加しました。

(飯吉 透)

(2) edX Global Forum

会議名称	**2017 edX Global Forum** (http://globalforum.edx.org)
期間・場所	12月5～6日、Fairmont Chateau Whistler(カナダ)
参加者	飯吉 透・酒井 博之・Isanka Wijerathne

12月5日から2日間にわたり、カナダ・ブリティッシュコロンビア州のFairmont Chateau Whistlerにおいて第7回目となるedX Global Forumが開催されました。edXおよびその加盟機関より関係者が集い、MOOCやそれを取り巻く教育全般に関する現状や課題、edXの今後の方向性等に関して議論がなされました。

今回のGlobal Forumでは、前年に注目の集まった、正規の修士課程プログラムとの単位互換を実現するプログラム「MicroMasters」や、企業や大学が提供する、ニーズの高い職業における専門スキルを学ぶ「Professional Certificate」プログラムについての成果報告がなされるなど、単独の講義配信に加えて教育プログラムとしてのMOOCの提供にも関心が集まりました。

(酒井 博之)

(3) Open edX Conference

会議名称	**2017 Open edX Conference** (https://con.openedx.org/) **EMOOCs 2017**
期間・場所	5月22～26日、マドリード・カルロス3世大学(スペイン)
参加者	Isanka Wijerathne

今回のOpen edXカンファレンスは、欧州のMOOC関係者が集うEMOOCsカンファレンス(European MOOCs Stakeholders Summit)との合同開催で、スペインのマドリード・カルロス3世大学がホストとなって開催されました。Open edXカンファレンスの参加者は約400名で、主にOpen edXの開発者、技術者、教育研究者、Open edXの関連企業などが参加しており、日本からは東京工業大学、大阪大学、慶応大学の関係者が参加していました。私は、特にテクノロジー面やMOOC・Open edXに関連するセッションを中心に参加しました。特に初日のチュートリアルセッションでは、京都大学におけるOpen edX導入に関してedXの関係者から貴重な情報を得る機会となりました。

また、同時開催のEMOOCsカンファレンスにも参加でき、edXとは異なるMOOCプロバイダの関係者から情報を得るなど新たな経験ができました。

(Isanka Wijerathne、訳:酒井 博之)